

第29回 IGC を迎えるにあたって

石原 舜 三 (地質調査所長)
Shunso ISHIHARA

地球科学分野のオリンピックに相当する4年に1回開催のIGC=万国地質学会議が初回(1878年於パリ)から1世紀以上も経過して、やっと1992年に国立京都国際会館で開催されることが、今夏のワシントンにおける第28回IGCで正式に決定された(写真1)。東京オリンピックは“戦後”が終りかけた1964年に開かれたが、IGCはそれに遅れること約30年である。国際学術会議に対する国の強力な財政援助が望まれる。

近年、国際的な政情の安定化と共に世界は小さく一体感を持つ方向に急速に向っているが、さらに人口増加、より豊かな生活を求めるために生ずる資源多量消費によ

我が国は高度成長により生じた公害問題の歪を短期間で解決した工業技術を持っている。また山地や軟弱地盤など小規模で複雑な地質的背景を持つ狭い国土で、資源を見つけ、かつ有効な土地利用をしてきた地球科学的技術を持っている。地震、火山噴火予知、地汙り防止など自然災害対策についても長い研究の歴史を持っている。

この様な日本の進んだ研究レベルを背景に、太平洋・フィリピン・ユーラシアプレートが接合するプレート境界域と言う世界で最も複雑かつ活動的な舞台を中心として、私達はいよいよ第29回IGCを迎えようとしている。今回の日本における開催の決定には、地球科学におけ

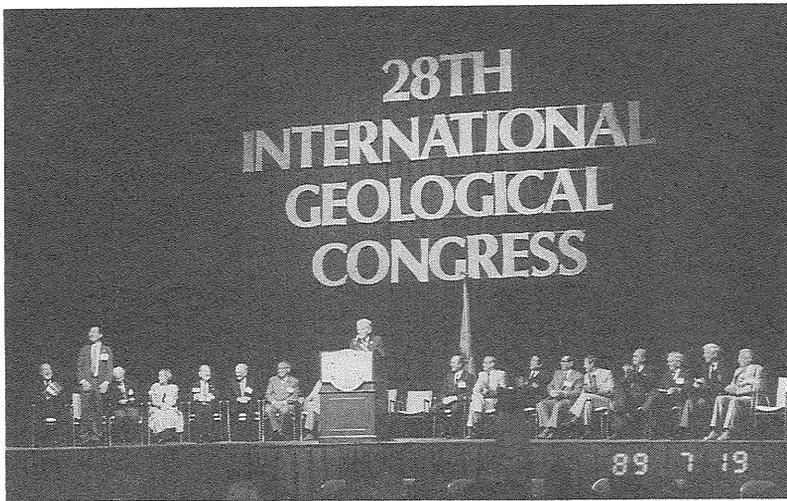


写真1 第28回 IGC の閉会式に当り、次回開催国の大会組織委員長として紹介される筑波大学佐藤正氏(左)。紹介者はワシントンの組織委員長 C.L. Drake 氏(中央)。

り、グローバルな環境・資源問題が全世界の関心事となってきた。このような時期に我が国でIGCが開かれることは、まことに時期を得ていると言える。

地球環境問題の検討はまだ始ったばかりで、まず定量的なデータ蓄積をしなければならない。たとえばCO₂・SO₂問題にしても火山からの自然発生量と工場からの人工的発生量比、循環系などの観測データが不十分であるし、地質時代の経験を現在に生かす試み、たとえば白亜紀の一時期には10℃もの温度上昇が考えられているが、それが地球環境に及ぼした影響の追及、また広大な海洋の役割りの研究なども早急に開始する必要がある。

る日本の先進性のみならず、一般の社会・経済的優位性に対する期待も込められている。サミットにおける我が国の提唱でスタートした「ヒューマン・フロンティアサイエンス・プログラム」はストラスブールを中心について活動し始めた。次回のIGCは人類と地球との接点におけるフロンティア・サイエンスを討議することになるであろう。世界の熱い視線のなかで、第29回IGCは国家的行事として成功させなければならない。私達関係者の努力はもちろんであるが、政府・産業界など広く国民の皆様にご理解とご支援をお願いしたい。